



JAA通信

(Japan Autonomous Academy)

日本自治 ACADEMY 会報誌

Vol.20 2025年5月発行

(ホームページアドレス)

<http://japan-a-academy.jp/>

[発行]

NPO法人 日本自治ACADEMY

北海道上川郡下川町西町 88-2 (株)谷組内

郵便番号 098-1205

Tel:01655-4-2595

Fax:01655-4-2596

E-mail:info@japan-a-academy.jp

Contents

●表紙写真:P1

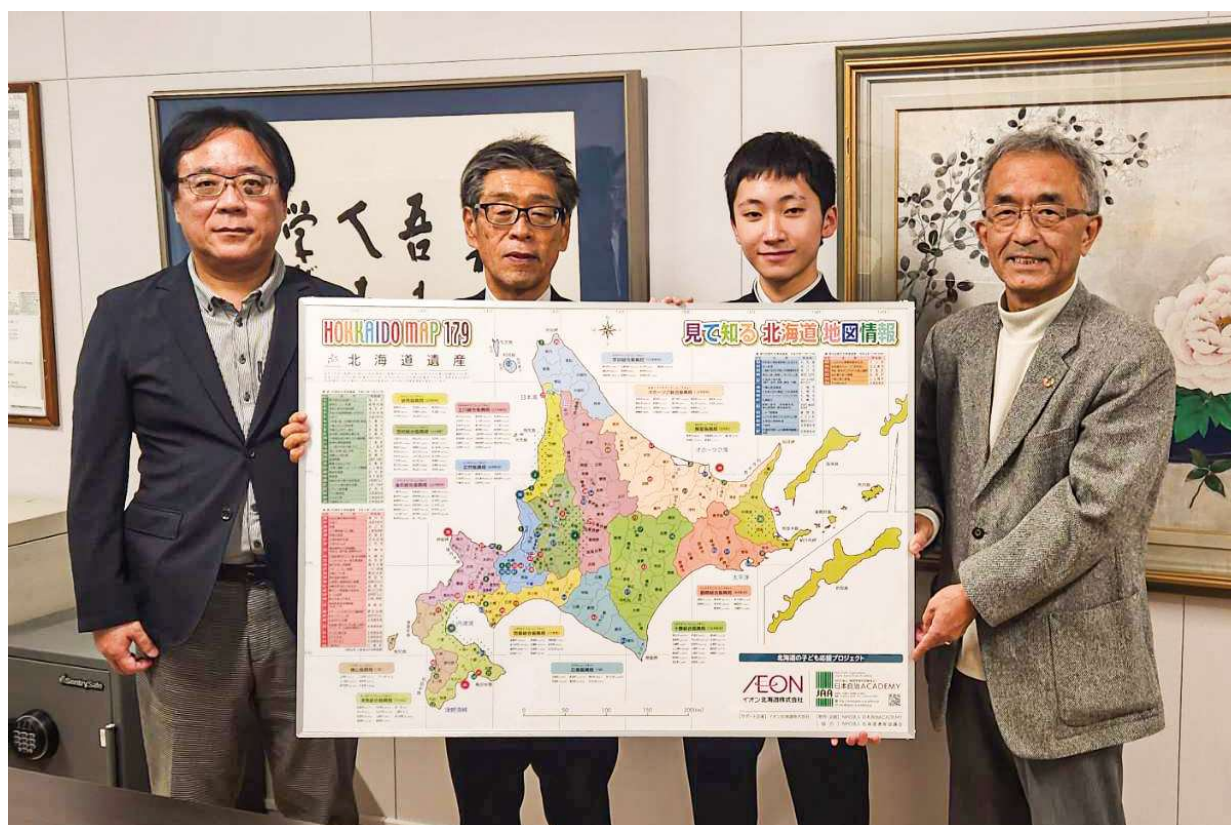
当 ACADEMY が取り組んでいる「でっかい北海道遺産マップをすべての公立中学校に飾ろう！」プロジェクトで、マップパネルを札幌市立中央中学校へ寄贈した様子を掲載しました。

●会員セミナー講演要旨:P2~P13

櫻井恵介さん(Letara 株式会社取締役 CFO)、向山博さん(蘭越町議会議員)、森正人さん(北広島市立西の里小学校教諭)から、大変貴重なお話を伺いました。

●フォーラムの概要:P13~P24

この2月に、台北駐日経済文化代表處札幌分處課長の鍾宜錚(ショウ ギ ソウ)さんと、アジアからの留学生3名をお招きし、グリーンシート21との共催により開催した「アジアと北海道のつきあい方 Part14」の概要について、ご紹介します。



でっかい北海道遺産マップ寄贈模様 日本自治 ACADEMY では、イオン北海道株式会社様のご協力をいただき、寄贈を希望する全道の公立中学校に、「でっかい北海道遺産マップ」を寄贈しています。2024 年 12 月 3 日には、イオン北海道株式会社執行役員の方(写真左)と、当 ACADEMY の谷相談役(写真右)が、札幌市立中央中学校(校長及び生徒会長:中央)に、マップをお届けしました。これまで、全道の 200 校に、このマップを寄贈しております。

会員セミナー講演要旨

日本自治 ACADEMY では、2024 年度に2回(①、5月17日 ② 10月4日)の会員セミナーを開催しました。1回目は、当 ACADEMY 会員の方に、PRを兼ねて近況報告や活動報告をしていただくこととなり、櫻井恵介さんと向山博さんをお願いしました。2回目は、北広島市在住の森正人さんから、教育現場におけるインクルーシブ教育の課題について、お話を伺いました。その講演要旨をご紹介します。

講演要旨 I : 5月17日開催

「人口衛星用推進エンジン開発に取り組む 北海道発宇宙関連事業について」

櫻井 恵介 さん

(Letara 株式会社 取締役 CFO)

(日本自治 ACADEMY 理事)

(はじめに)

こんにちは。Letara 株式会社で、チーフ・ファイナンシャル・オフィサー (CFO) をさせていただいている櫻井恵介と申します。本日は、我々の携わっている宇宙業界とか、会社自身のアピールの機会を設けていただきまして、誠にありがとうございます。

会社名の Letara というのはアイヌ語でして、「ゴールデンカムイ」というアニメの中で、Letara という名前のキャラクターがいるので、若い方ならご存知の方もいらっしゃるかと思いますが、「真っ白な」とか、「何も染まっていない」という意味合いが込められている言葉です。

私たちの会社は、いろいろな方のご支援によって成り立っていますが、そうした皆様方に、私たちの色を染めていただこうという思いが込められています。会社は、北大発のスタートアップ企業でございます。



本日のお話は、①会社概要、②宇宙事業について、③Letara の経営理念・Vision、④解決すべき課題、⑤解決方法、⑥ビジネスモデル、⑦実績、⑧今後の展望という内容で進めさせていただきます。

(①会社概要)

私たちの会社は、主に人工衛星など、空気の無い空間(真空空間)で使うエンジンを開発して、製造・販売を行う事業に取り組んでいるエンジンメーカーでございます。

今は、北大の中にある北大ビジネス・スプリングという北大発スタートアップ企業が集まるオフィスを拠点にさせていただいております。

また、私たちの会社は北海道に根付きたいという思いを持っているので、廃校となった滝川市の旧江部乙中学校の校舎を購入させていただき、そこで、エンジンの燃焼試験など、いつでも使える研究開発拠点としての設備投資を進めているという段階でございます。

役員は4名おりまして、コア技術の発明者でもある共同代表取締役が2名(KAMPS Landon、平井翔太)、それから取締役である北大教授の永田晴紀、この方は、2000年代初頭から約25年間、民間ロケットなど民間に適した宇宙機器の開発を続けてきまして、共同代表の二人は、この永田研究室の出身です。師弟関係で取り組んでいる事業ということです。この3人が技術開発中心の仕事で、技術開発以外の資金調達、法務、広報などの様々な業務を取締役(CFO)である私、櫻井が担当しております。

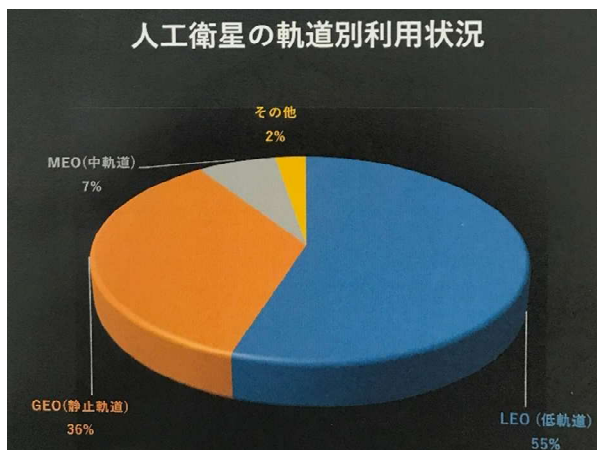
（②宇宙事業について）

宇宙事業には、天気予報、地図アプリのための気象衛星や観測衛星、通信事業を行う通信衛星、娯楽の分野の衛星放送、それからロケットが代表格の輸送サービス、最近では国家的プロジェクトの宇宙探査などがあります。

宇宙事業がどれだけの発展の可能性があるかということですが、2040年には全体で100兆円の市場になると言われています。80兆円と言われるスマホ市場を超えます。

では、宇宙とは地球の表面からどれくらいかということ、一般的には、高度100km以上から宇宙になると定義していますが、アメリカの空軍では80km以上を宇宙と定義しているので、大体80～100km以上が宇宙ということになります。

宇宙に出ると、人工衛星が漂う軌道がいくつかありますが、地球から近いところから、低軌道（100～2,000 km）、もう少し遠いのが中軌道（2,000～36,000 km）、それより遠いのが静止軌道（36,000 km～）です。宇宙事業を行っている会社は、この3種類の軌道のいずれかを使っていることになります。



通信・衛星放送、気象衛星は一番遠い静止軌道を使っています。遠い地点から通信を届けると、衛星一機で広い範囲をカバーできます。一方で観測衛星は、低軌道が適しています。観測ポイントを細かく見たいという目的がありますので、低軌道だと、より近いところから具体的な事象を捉えることができます。

人工衛星は、今後、5万機以上の打ち上げが計

画されています。2010年に80機台であったものが、2022年は、2,400機にもなっています。

このように宇宙事業は拡大しておりますが、問題も生じておりまして、宇宙デブリ（宇宙のゴミ）が深刻化しています。アメリカでは、既に立法措置も行われています。

NASAの統計では、宇宙空間に浮遊する人工衛星のうち、94%が運用を終了していて、実際に運用中の衛星は全体の6%といわれています。

私たちの会社は、人工衛星用のエンジンを製造・販売する会社ですので、エンジンを搭載していない衛星が多いがゆえに、ゴミになって放置されているということですので、民間事業者が購入しやすいエンジンを市場に届けることで、宇宙デブリの更なる増加を抑制することに貢献できると考えています。

（③Letaraの経営理念・Visionについて）

「北海道と共に宇宙へ」というのが、私たちの会社の経営理念です。「FROM」ではなく、「WITH」です。「北海道と共に」ということを強調したいと思います。私たちが行っている事業は、北大発のスタートアップ企業で、これまでずっと北海道の方々から支援を受けており、そういう方々に支えられて、今日があります。

会社化して4年が経過しましたが、自分たちが大きくなることで、北海道自体の活性化につなげていきたいと考えております。研究開発の拠点を決める際、福島県や兵庫県などからもお声をいただきましたが、北海道内にこだわったのもそういう点があるからでございます。

次に、長期目標（Vision）について、お話させていただきます。私たちは、まだまだ人類の活動点は狭いと思っています。ほとんどの衛星は地球から一番近い軌道を利用して、人類としての宇宙は近くに留まっているというのが私たちの認識です。

私たちは、そういった宇宙を、月とか火星とかよりもっと遠くの宇宙に広げることに貢献したいと考えています。そして人と物が広い宇宙空間を自由に行き交う未来を目指しています。

(④解決すべき課題)

その目標を達成するには、どうしても解決しなければならない課題がございます。それは、安全でしかも高推力（パワーがしっかりある）な宇宙移動用のエンジンが必要ということです。

衛星はロケットにより宇宙空間に運びますので、衛星自体が自力で宇宙空間にいくわけではありません。宇宙空間でロケットから切り離された地点、それが、その人工衛星の行きたかった場所でないかもしれません。むしろ行きたい場所でない方が多い。

自分たちが行きたい高度、軌道に自力で移動しなければなりません、そういった民間事業者が導入しやすいエンジンがないというのが、今の市場の課題です。

宇宙移動用エンジンは既に存在していますが、それは、民間事業者が活用できるものではありません。爆発が伴い、宇宙空間をすばやく移動できますが、非常に危険なエンジンです。燃料自体も危険なもので移出入が大変ですし、かなり重厚なクリーンルームや防御服が必要です。薬品を扱う特殊な資格を持った方も確保する必要がありますので、製造コストがかなり高く、エンジンだけで、90 億円ぐらいかかってしまいます。

また、上記の問題を解決するものとしては、電気系のエンジンがあります。このエンジンは安全でかつ安い。しかし、こういったエンジンは移動に使うものではありません。パワーが上記と比べ、10 万分の 1 しかありません。数分で着くものが年単位になってしまいます。

(⑤解決方法)

私たちは、それを解決すべく、燃料にプラスチックを利用した世界初の小型人工衛星用ハイブリッド化学推進エンジンを開発中です。

このエンジンは、もともとこの性質として、推力が備わっています。宇宙空間をすばやく移動できます。かつプラスチックが燃料ですので、手で触っても何の問題もありません。防御服とかクリーンルームの設備も必要ありません。そして、今は研究開発中ですので、このプラスチックは

アマゾンから調達しています。アマゾンで自由に買えるぐらいですから、コストも下がります。既存のエンジンよりも 10 分の 1 以下の価格です。

民間事業者からすると、すばやく移動ができて、安全管理コストもいらないし、お求めやすい価格ということで、興味のあるものになろうかと考えております。

なぜ、このようなエンジンの開発が可能かというと、北大に認定いただいているというのが非常に大きいと思います。先ほど、私たちの会社の役員である永田が約 25 年近く、民間ロケットの開発を担ってきたということを申し上げましたが、それがそのまま使えるというのがかなり大きいです。

民間の視点に立った研究開発を行ってきたがゆえに、このような製品ができるようになったのに加え、私たちの会社には、トップ技術がありますので、民間がお求めやすいエンジンができるということになります。

私たちのエンジン開発では、世界初のことに取組んでおります。ハイブリッドエンジンというものを宇宙空間でも実現すべく、研究開発を進めております。

既存のエンジンは、液体燃料のエンジンか、ゴムなどの固体燃料のエンジンになりますが、私たちは、固体と液体を混合させる、そういう取組みを行っております。先ほどプラスチックが燃料となると申し上げましたが、プラスチックは固体です。ただ、これだけでは、点火というところができないので、これに加えて、医療機関でも使われている液体亜酸化窒素を使うことによって、真空の宇宙空間でも点火させて炎に変えて、その炎にパワーを持たせるというところまで、成功させております。

私たちの技術開発は、ハイブリッドエンジンの分野でいうと、最先端の技術開発を行っている、それを北海道でやっているということです。

(⑥ビジネスモデル)

人工衛星の推進用エンジンを開発し、製造し、

それを衛星事業者などへ販売するというものでございます。売ったお金が、私たちの収益になります。市場規模は宇宙事業全体で 100 兆円市場になるといわれていますが、それは 2040 年の長期的な話です。2026 年のあと 2 年後には、エンジンの市場だけで 6,000 億円になるといわれています。大変有望な市場です。コミックマーケットとほぼ同程度の規模です。

(⑦会社の実績)

宇宙事業は、本当に資金が必要です。昨年(2023 年) 2 月に初めての資金調達を行いました、これが 1 億 2,000 万円です(J-KISS 型新株予約権の発行)。

それから、合計 3.4 億円となる 2 件の大型補助金をいただきました。ほかにビジネスコンテストでの受賞もあり、徐々に対外的な評価をいただける段階になってきております。

(⑧今後の展望)

最後に今後の展望についてお話させていただきます。一番大きなポイントは、2 年後の 2026 年に宇宙実証試験を行います。実際に宇宙で私たちのエンジンを動かします。

宇宙業界では、商慣習として、宇宙実証したかどうかということが非常に問われます。この宇宙実証を確実に実施するために、まずは今年中に、モデル品を完成させて、そのモデル品を使って、来年、2025 年にはスペースロケットに載せても大丈夫という安全審査基準のテストに合格させる必要があります。

そして、宇宙実証時には、販売も行っていることをリリースしまして、それから、概ね 4 年以内には、上場を目指していきます。

私の仕事である資金調達、2024 年だけで、2 回行わなければなりません。これは本当に大変な仕事です。まもなく 1 億 5 千万円、これだけでは足りないので、今年の後半に、約 10 億円の資金調達を予定しております。

皆様方にはいろいろな面で応援していただきたいと思います。今日は、どうもありがとうございます。

講演要旨Ⅱ：5 月 17 日開催

「らんこし米・米-1 グランプリ

In らんこしの成り立ちについて」

向山 博 さん

(蘭越町議会議員)

(米-1 グランプリ実行委員長)

(日本自治 ACADEMY 会員)



熊谷理事長からお誘いいただきまして昨年度から会員となりました。向山博(むかいやま ひろし)でございます。よろしくお願いいたします。まずは、私の業歴からお話させていただきます。

私は大病を 2 回ほどしておりますが、これにより私の生活は大きく変わりました。私は 1951 年、蘭越町のニセコ山系の山の下、熊が出るようなところで生まれました。蘭越高校に入学したのは昭和 42 年。その時に始まった第一次構造改善事業で、隣近所が全然見えなかったのが、ブルドーザーで平地となり、見渡せるようになりました。高校時代には、米農家の父に頼まれ、トラクターも動かしました。

高校を卒業しまして、私も米農家となり、19 歳で結婚しました。ただ、米農家は比較的暇だったものですから、1975 年に、お米の方は妻に任せ、叔父が経営している測量会社に就職し、こちらの方が本業となってしまいましたので、お米の方がアルバイトになってしまいました。

そして、測量会社で一生懸命働いていたのですが、52 歳(2002 年)の時に、脳梗塞で倒れ、

その時は経過をみていたのですが、また、2008年に脳梗塞になりまして、手術をしました。

この時期以降、全く生活が変わりました。2004年の食糧法改正でお米は届け出ると、販売は自由ということになり、これが、私をすごく後押ししてくれましたし、脳梗塞の原因が、煙草とストレスということだったので、煙草はすぐ止め、ストレスのある会社勤めも辞めて、お米農家に戻りました。そして、お米のネット販売を始めるとともに、それが縁となり、札幌三越とも繋がり、地区の仲間と、三越でのお米の販売にも取り組みました。その後、一人で三越で販売を続けていましたが、今は体力的なこともあり、離農しましたので、米-1グランプリの実行委員でもある蘭越町の坂野さんに跡を譲って、「坂野の米」ということで、三越での販売が続いておりますので、皆様に蘭越米をご賞味いただければ幸いです。

2005年には蘭越町農業委員となりました。その時期は、私がホクレンさんから、「ゆめぴりか」をホクレンさんに出荷しないと種子は渡しませんといわれていた時期でしたが、関係者のご努力により、蘭越では種子が手に入るようになりまして、美味しい蘭越米の生産に励むことができました。

では、米-1グランプリについてお話する前に、美味しいお米が出来る条件について、考えてみたいと思います。

まず、寒暖差のある気候が必要だと思います。本州の中山間地は寒暖差があるので美味しいお米ができます。米-1グランプリには多くの方から出品していただいておりますが、グランプリを獲得した岐阜の方は、650mの高地で米を生産していました。北海道でいえば、中山峠です。中山峠ではお米はできませんが、北海道は平地でも寒暖差がありますので、美味しいお米ができる条件が整っています。

2点目は、ミネラル水を多く含む水が必要です。日本には、多くの河川があり、水資源に恵まれています。蘭越町も周囲をニセコ連峰等の

山々に囲まれ、町の中央部を清流「尻別川」が、多くの支流を集めて日本海に注いでいます。水に恵まれています。

3点目は、水はけの良い土壌が必要です。これは昔はなかなかできませんでしたが、土地改良事業のおかげで、今はどこも水はけの良い土地ができて、美味しいお米ができるようになりました。

それでは、本題の米-1グランプリについて、お話したいと思います。第1回大会は2011年（平成23年）に開催しました。

この大会は、平成20年と21年に山形県、福島県で開催された全国規模の米コンテストで、蘭越町の生産者が優秀賞と金賞を受賞したことを受けて、生産者の間から、本町でも全国的な米コンテスト開催の機運が高まったことが、開催のきっかけとなりました。米-1グランプリという大会名称も、漫才の人気イベントのM-1グランプリにあやかったものです。

そして、昨年（2023年）の第12回大会には、全国の皆様から過去最高の380品もの出品をいただくまでとなりました。

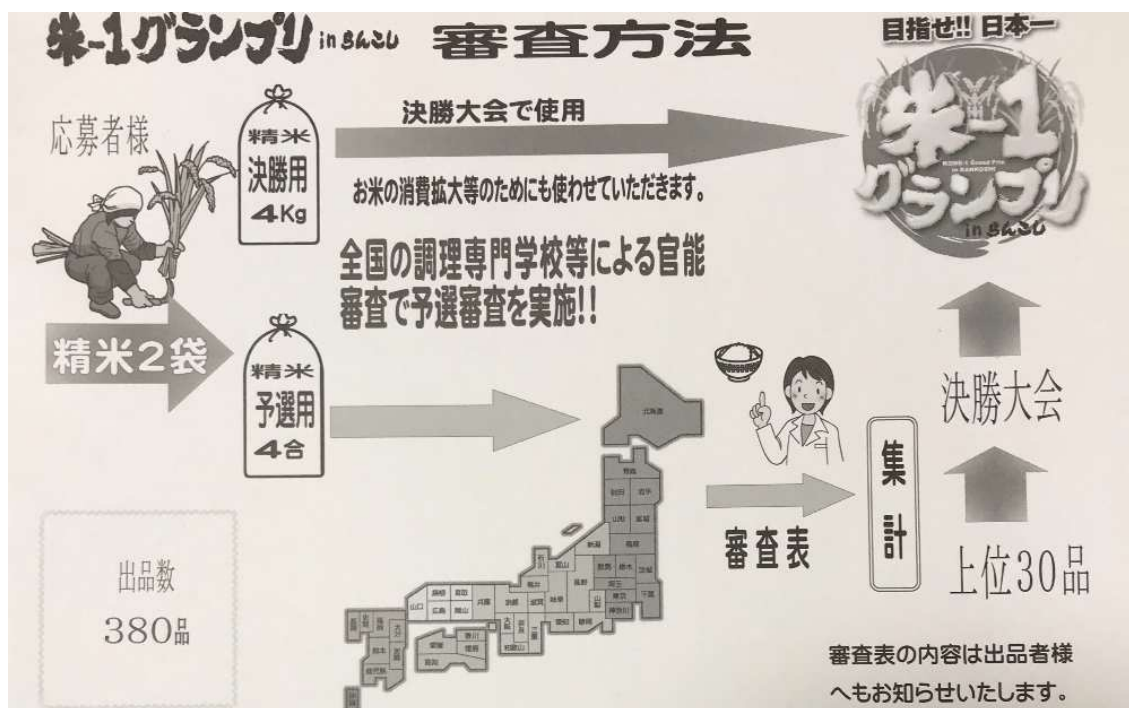
その審査方法ですが、予選審査として、全国の調理専門学校、米屋さんなど35の学校等に協力をお願いし嗜好型の官能審査を行っております。

学校等は、東・北日本の学校等と南・西日本の学校等に分け、一つの出品米は必ず東・北と南・西の学校等で審査されるようグループ分けし、審査側には、産地や出品者、品種などの情報はお知らせしていません。

その予選審査結果により、上位30品を選び、決勝大会進出としております。

実は、第1回大会の予選審査は、蛋白などの数値を測定する機械審査でした。この機械審査に問題がありました。予選を通過した北海道の米は蛋白が比較的高く、機械審査では評価が低かったのですが、最後には、北海道がグランプリをとってしまいました。

この経験から、蛋白とかアミロースとかにこ



だわることなく、あくまでも人間が五感を研ぎ澄まして、食べて判断したものが、一番評価がいいということになり、第2回大会からは、予選審査においても、嗜好型官能検査に変更した経緯があります。

また、米-1 グランプリに出品するには、出品料1万円、予選審査用の精米4合（600g）、決勝大会用の精米4kg、それから出品米の生産履歴を用意していただいております。

当初始めたころは、1万円に、米4^{キロ}出して、出品する人がいるのか、そして何が当たるのかと言われました。賞状と盾しか当たりませんが、今も、出品者は減っていません。

決勝大会では、予選審査を通過した上位30品でグランプリを競うわけですが、官能審査の万全を期すため、決勝大会における予選ブロック（5ブロックに分け、各ブロック上位2品が準決勝へ進出）の各ブロック3位の上位2品が準決勝に進むという敗者復活制度を第7回大会から設けるなど、審査方法の改善に取り組んできました。

その甲斐があり、出品数は、第1回大会から300品前後で推移し、昨年（2023年）の第12回大会では過去最高の380品となりました。

この米-1 グランプリの開催は、これまで多く

のマスコミに取り上げられ、道内はもとより、道外からも数多くの問い合わせをいただくなど、大会を通じて、蘭越米の知名度は着実にアップしてきました。

しかし、出品者の多くは決勝大会当日は蘭越町にあまりいらっしゃらない、道内の消費者にこの大会の認知度が低い、この大会を持続させる蘭越町内の生産者の後継者が育っていないなどの課題が残っています。

私たちは、このような課題の解決に取組、この米-1 グランプリを名実ともに、全国的な米のイベントとして発展させていきたいと考えているところです。

時間がまいりました。最後になりますが、第1回から昨年の第12回までのグランプリをみると、北海道の「ゆめぴりか」と岐阜県の「いのちの粳」の二つしか入っていません。共にもちもち型の米なんですけど、大会に出すといったら、普段365日食べれるお米よりも、特徴のあるお米がいいのかなという気もしています。

今年も第13回大会、11月23日に予定しています。皆さん、その頃にはああやってるな、ああ頑張ってるなと、心の中で拍手をお願いします。今日はどうもありがとうございました。

「教育現場における インクルーシブ教育の課題について」

森 正人 さん

(北広島市立西の里小学校教諭)

(北広島市障がい者自立支援協議会会長)

プロフィール

昭和39年余市町生まれ。昭和62年3月北海道教育大学函館分校養護学校教員養成課程修了。平成11年3月国立特殊教育総合研究所長期(1年間)研修生修了にて特別支援学校教諭の専修免許取得。

北海道函館児童相談所、岩内中央小学校(通常学級担当)、北海道余市養護学校、北海道札幌養護学校もなみ学園分校、大曲東小学校(特別支援学級担当)等を経て、平成26年4月より現職。平成28年には文部科学大臣優良教員表彰を受賞している。

現在、北広島市障がい者自立支援協議会会長、北広島市保健福祉計画検討委員会委員、北広島市教育委員会特別支援教育サポートチーム巡回教育相談員・調査員、北広島市就学支援委員のほか、日本児童学会、北海道特別支援教育学会、日本ピア・サポート学会等でも活躍中。

(はじめに)

西の里小学校で特別支援教育コーディネーターという肩書で仕事をさせていただいている森正人です。よろしくお願いいたします。

今日は、今、私が教育現場にいる人間として見ている日々の中から、インクルーシブ教育の課題を皆様に少しでもとお伝えできたらと思って。また、皆様には、公立学校といえども、隣の学校とその隣の学校は全くとはいいませんが、違うという現実があるということも、知っていただくとともに、地元の学校なり、子どもを育てている諸機関を少しでも支えていただければと思っています。

また、私は、市の障がい者自立支援協議会の仕

事もさせていただいております。これまで、子ども支援部会と、生活支援部会と就労支援部会という三つの部会で、自立支援協議会を構成していましたが、そこに医療的ケアが必要な人たちもいるし、精神障がい者の方たちの支援も足りないということで、そういう方たちも包括した形で自立支援をしていこうということになっております。

そのような仕事をしている中で見えてくる学校の話や、私が日々過ごしている小学校の現場の話をしながら、以下、進めていきたいと思います。

(インクルーシブ教育とは)

教育現場におけるインクルーシブ教育の課題は、やはり人とお金です。人、お金がどのように使えるかにより、かなりインクルーシブ教育の姿が変わると思います。

では、インクルーシブ教育とは何なのか。お手元に「ジチタイワークス」が発行している資料をお配りしました。インクルーシブ教育については、いろいろな団体がいろいろな視点から課題を絞って取り上げています。今日は「日本自治ACADEMY」の主催ということで、自治体に注目して、インクルーシブ教育の事例を紹介しているこの団体の資料を使い、説明していきます。

ここでは、「インクルーシブ教育とは、障がいの有無にかかわらず、全ての子どもが共に学ぶ仕組みのことをいう」とあります。全ての子どもが共に学ぶ仕組みと聞いて皆さんわかりますか？

私が子どもの頃には、すでに特殊学級というものがありました。ちょっと勉強のできないお子さん、ぺらぺらと話ができないお子さん、同じ子ども同士なのですが、何かちょっと違うというお子さんが、その特殊学級で過ごしているのを垣間見てはいました。私がこの仕事を始めたのは、その辺とも関係があります。

私の自己紹介の資料には余市町出身とありますが、余市町の小学校に入学したのではなく、父

が、小樽の蘭島駅に勤務しておりましたので、その官舎から、忍路中央小学校というところに毎日通っておりました。

その学校には、特殊学級がありませんでしたので、そこには、いろんな子が自分の教室におり、他のことは、問題なくできるのに、漢字だけは苦手という子おりました。4年生の途中までそこにいました。みんな一緒の世界でした。

家庭の事情で、生まれ故郷の余市町に戻る形になり、大川小学校という1学年3~4クラスある大きな学校に移りました。丁度、特殊学級が出来始めた時期でした。

私の恩師である4~6年生の担任だった先生が、その後、特別支援学級の先生になられて、私は、毎年のクラス会などを通じて、その先生がやっている仕事を中学生や高校生の時に、見たり聞いたりしていました。何となく影響を受けていたと自覚しています。

その後、高校を卒業する時に、学校の先生に向いていると言われましたが、みんなと同じことはやりたくないと思い、その当時は珍しかった養護教諭養成課程を受けまして、今に至っています。

それで、インクルーシブ教育の共に学ぶ仕組みというのは、場所として共に学ぶのか、内容として同じことを学ぶのか、いろいろなイメージがあると思うのですが、この令和の時代に語られているインクルーシブ教育というのは、学校としては、インクルーシブ教育が可能な場として、自分が選んだ場所で勉強できるというふうにしてほしいんです。

私は、みんなと一緒に勉強したいから、みんながいる教室で勉強したいとか、私はみんなと一緒にだとストレスが溜まるから、別のところで勉強したいとか、あるいは、私はこういう環境がそろっているところで勉強したいとか。

文科省が考えている学びの選び方はそこを理想としているのですが、厚生労働省とかは、障がい者福祉の観点から、みんな一緒のところで、同じものを見たり聞いたりして、お互いの姿を見

ることで理解が深まると思うから、そうしようと考えています。

さて、どっちの考え方が現実的なのかというところが、今日の話の行き着くところになると思います。

インクルーシブ教育は、平成6年にユネスコとスペイン政府によって採択された「サラマンカ声明」という有名な声明文があり、そこからスタートしています。

これまで、日本の教育現場では、障がいのある児童・生徒は、支援学校や支援学級を選択していくとされてきておりますが、現行で、文科省が示している学びの場の選び方というのを民間のシンクタンクが図案化したものを持ってきました。

ご覧いただいているように（次ページ）、専門家による早期からの支援・情報提供の機会から始まっています。ということは、専門家が必要なんです。それから早期からの情報提供の機会ということは、当事者ではなくて、当事者を真ん中に置いた周辺の誰かが支援したり、情報提供をしなければ始まらないということです。

ですから、就学時健診は、自治体でやっていると思いますが、そのやり方については、形としては同じですが、どんなお医者さんがいるか、どんな保健師さんがいるか、あるいは何人ぐらいの人がいるかなどにより、それが、充実しているかないかが決まってきます。

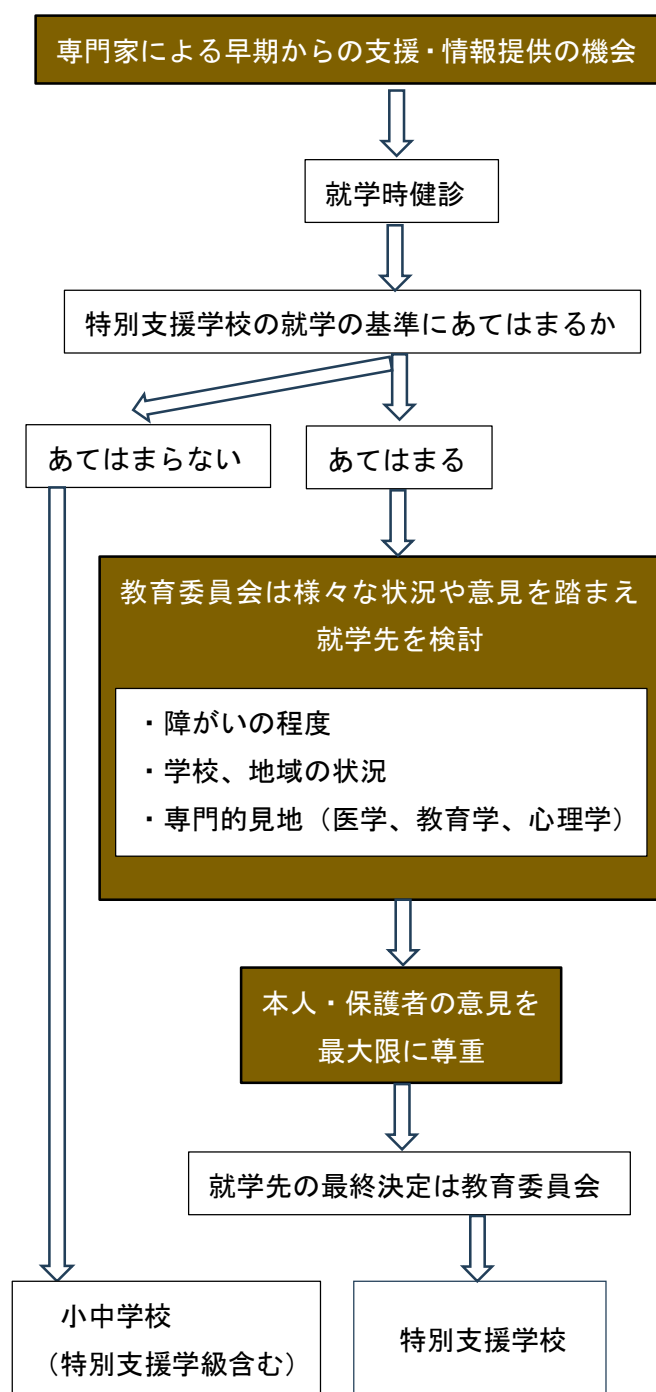
その次に、特別支援学校の就学の基準にあてはまるかどうかと書かれていますが、その基準にあてはまるかどうかを協議しているのは、各自治体の教育委員会の中に、教育支援課であるとか、就学支援課とかの名称の組織のもとで集められた特別支援に関与している専門家の先生たちや、お医者さんです。

となってくると、本当に自由に選択しているかというところでは、人によっては、専門家の皆さんがそういうなら、やっぱりこの選択しかないですねという人もいるでしょうし、誰が何といおうと、ここの学校のこの教室に入りたいと

いう人も当然いるわけです。

ですから、教育委員会の職員の方々が一番苦労されるのは、それをどうなふうに折り合いをつけて、気持ちよく入学させてあげるかということです。いろいろ悩んだ結果、支援学級を選んだことは素晴らしいことですねとか、お子さん

【文科省が示している学びの場の選び方】



※ その後も柔軟に就学先を見直していく

の将来を考えてそうされたんですねということ。それが大人の理想です。

次に、子どもなんですが、子どもは小学校に入る時は、わけもわからず、ご両親が納得されている選択肢のところへ行きます。

ところが、4年生ぐらいになると、自分はここにいたくない、あそこがいいと思う子が出てきます。その時に、その思いを拾うのは、親御さんの場合もありますが、往々にして、学校の先生の気づきや拾い上げによって、その扉が開かれます。

私を含めて、市の就学指導支援委員会のメンバーは、ある程度の年令のお子さんの場合は、本人の思いを必ず確かめることにしています。

親御さんがいくら納得しても、本人がいやだと言えば、通えないんです。悪くすると、不登校にもなりますし、うつ病になったり、発達障害を持っているような症状が出たりすることもあります。

ですから、ご覧いただいた図では、あっさりとした流れで記されていますが、この各段階で、常にいろいろなことが起きて、私たち関わるものは、インクルーシブという考え方がその子にとって、メリットがあるのならおすすめするし、まわりはすすめているけれども、その子が全然幸福感を得られないのであれば、おすすめしないという考え方を常に持つようにしています。

これまでの話で、インクルーシブについて、「単に子どもと一緒に学ぶ仕組みを目指せばいいんじゃない」というぐらいのイメージは持っていたかだと思います。

（インクルーシブ教育の取り組みと課題）

文科省は、平成24年に「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進」という報告書を出しています。これは、学校教育で、どのように進めていくかを示している文章です。

その中で、インクルーシブ教育システムにつ

いて、まず、障がいのある人とない人がともに学ぶ仕組みであると書いてありますが、障がいだけに限ったものではないと思います。

それから、障がいのある者が、教育制度一般（私たちが普通とってきた学校の制度一般）から排除されないことともなっていますが、果たして現場の状況はどうなのでしょう。と考えた時に、私は日々の授業の様子を見ていて、発達障害の診断を受けているお子さんが、統計上、5～6%、最近は8%といわれていますが、おそらく現実的にいって、1割はいます。

常にしゃべったりしている児童もいます。それはお行儀の問題ではなくて、脳がしゃべるようにたきつけているわけです。本人はしゃべる気はないのに、ずっとしゃべっています。

となると、先生が真面目に授業をしようとする時に、邪魔になるわけです。だけど一緒に勉強してください。これがインクルーシブ教育なので、先生はこれに配慮して授業してくださいとなるわけです。

これが成立するかしらないか、本当に綱渡りなんです。小学校1年生の時から一緒に育ってきて、6年生になるまでの間に、何々君こういう人だからと思ってくれればいいのですが、必ずしもそうではありません。

地域によっては、転入、転出が多いところもあり、学校規模や学校事情によっては、大体2年ごとに学級編成があるところ、1年で行われる場合もあります。

そんな状況で、どの子にも配慮して一人の先生が授業をする、しかも何月何日までに、ここまでの教科書を終わるという計画がきちんと立てられている公教育のカリキュラムがありますので、大変苦しいわけです。

ですので、多様な生き方を認め合う社会を作るために、インクルーシブ教育を推進することは大事な事であるし、そのために次世代を担う子どもたちへの教育が重要であるということは間違いありませんが、誰がどうやってやるのというのが現実です。

次に、インクルーシブ教育の方法と進め方ですが、まず、早期からの教育相談・支援で「教育支援計画」を作成することです。

教育支援計画を作成している児童については、うちの学校ですと、350人の全校児童数のうち、特別支援学級に在籍している児童22人、それから、通常の学級に在籍している児童で、医師から診断を受けていて、支援が絶対に必要であると誰もが確認している児童が2人、それから、その予備軍と位置付けている児童も含めまして、70人ほどとなります。

私が1年の間に、何らかの教育相談を希望されて、教育計画を立てたり、担任の先生にも特性をわかった上で、授業をしてもらいたいとして発達検査をする児童が、年間に20人から多い時は50人くらいになります。

実際、発達検査をしてみると、発達のバランスが悪い児童と、意外とIQの高い児童に分かれます。特別支援教育というのは、平均値から高くても低過ぎても、特別なことをしてあげないといけないわけです。

勉強に困ったり、人間関係づくりに困っているような児童は、標準値以外の児童です。例えば、100人の児童のうち、50人はこのぐらゐの姿で標準値、残りの50人は高い方と低い方に25人ずつ分かれるわけです。

その児童が、どんな思いで、毎日の授業や学校生活をしているか、また、親子関係を過ごしているか、というところが、特別支援教育で対象としている相談内容となってきます。

そして、この「ジチタイワークス」の資料の文章を書いている方は、「合理的な配慮」というところに着目しています。

今、一番教育委員会が頭を抱えているのは、合理的な配慮だと思います。教育支援計画を作成する上で、合理的配慮の提供を行うことが重要となるということで、令和3年5月に「障害者差別解消法」が改正され、行政における合理的配慮が義務化されました。

市教委でも、市の政策の中でも義務化されたことが取り上げられていますが、では義務化されたら、どのようにすればいいのか。

誰かにメリットがあることは、本当にみんなにメリットがあるのか、よく考えないといけない。それを考える時には、実際にそれが普及した時に、誰の役に立っているのかをリサーチすることが必要だと思います。

そのリサーチがしやすいのは、小さな規模の範囲の人たちだと思っているので、学校単位とか自治体範囲になってくると思います。

私が住んでいるこの周辺ではどうなんだろう、一人一人がそういう視点で物事を見ていくと、本当にみんなが必要としているものが見えてくると思います。

次に、「基礎的環境の整備」という言葉がでてきます。内容をみると、「専門性のある指導体制の確保」「施設・設備の整備」「教材の確保」となっています。どれも、お金と人なんです。

お金だけあっても、人がいなければできないですし、どんな技術が開発されても。使いこなす人や、それを導入する予算がないと環境は作れませんので、なかなか思うようにいかないのが実状です。

しかし、お金や人がいないと支援できないのか、共生できないのかというところではない。遡ってみれば、何の制度もない時代に、私たちは同じ教室で、いろんな子がいたり、いろんな先生がいて、助け合ってきました。もちろん同じ量の差別はありましたが、理解をして協力していた人はいたはずです。

ハンディキャップのある人や少数派の人たちはどうしたら暮らしやすいかをまず考えてあげた方が、実質的には手の届く支援になり、環境整備になるのかと考えています。

そして、この文章では、環境整備が追いついていないのが課題となっていますが、追いつかないと思います。しかし、環境が箱ものだったり、お金がかかるものであれば、追いつかないかも

しませんが、身近な人にどれだけ理解してもらおうかというのが、まず環境整備の入口だと思います。

家族よりも周りの人が支援した方が、本人がありがたいと思えたり、ありがたいと思った子たちは、自分ができることでお礼をしようとしていたりする、それが人間関係の基本なんだと思います。

そこを大事にした上で、お金があれば環境整備を、人がいれば、人を使った環境整備をすることになるのかなと思っています。

次に、「教員の専門性が足りない」とあります。

私は今の職場が4年目で、1年目に、コーディネーターを引き受けましたが、児童数350人、18学級の規模です。1人で出来ることには限りがありました。

担任も持っていましたので、2年目には、コーディネーターの増員をお願いし、3人になりました。学校には、学習支援員さん、特別教育学級支援員さん、特別教育学級の子たちに対する介助員さん、さらにサポートで配置される先生などがおりますので、その3人が、それぞれ自分と関係のある方と話ができるので、情報が集まりやすくなりました。

今年は4年目ですが、気になる子の情報については、パソコンに日々情報を入力しています。若い先生たちは、パソコンでの情報処理に手慣れているので、有効に活用できるよう、様々な様式を作成してくれています。

今では、病院のカルテの蓄積のように、個々の児童の6年間の情報がわかるように整理されており、小学校から中学校への引継ぎの時には、文字で理解できるようになっていますし、どんな状況の子でも、その子にあった指導が検討できるようになっています。うまくいくかどうかは別ですが、私は知らないという状況にはなっていません。

しかし、小学校を出て、中学校へいくと、中学校では、高校受験にうまくのせていくことが最

大の目標になってしまっているのです、特別支援どころではなくなっています。せつかく、引き継いだ情報も活用されていないのが実状です。

あえて、少し悪い例を出しましたが、そうならないように、今は小中一貫教育というのが、看板としてあげられたりして、情報共有や、日々の情報交換をすることになっていますが、どうもそれは、学習指導の方が中心になっていて、なかなか共生社会を築いていくというような流れに乗った先生たちの目線は難しいように思いますが、私どもとしても、各種情報提供などを通して、中学校の先生と、積極的な連携を図り、努力を積み重ねていかなければならないと思っています。

(終わりに)

この「ジチタイワークス」の資料では、大阪府枚方（ひらかた）市と神奈川県教育委員会の実践が紹介されています。これをみると、情報としてはやれてるなと思いますが、実際にその場に行った時にどうなっているかはわかりません。

ただ、このようなやり方をすると、このようになるという発信はすごく大事だと思いますので、皆さんがお住いの各自治体でも情報発信をして、近隣自治体同士で参考にし、人的サポートなり、資金の捻出の仕方、どうやって人を育てるかというところの工夫につながっていけばいいかなと思っています。

また、インクルーシブ教育について書かれている文科省のホームページを是非ご覧になってください。

私たちの目の前にある課題は何か、共生社会を目指すのかどうか、リアルなそれぞれの皆さんの価値観を持っていただきたい。その上で、意見交換なりをしていただけたら、将来に向かって、子どもが間接的にすごく支えられていくと思います。よろしくお願いいたします。

フォーラム「アジアと北海道の つきあい方 Part14」の概要

日本自治 ACADEMY では、2025 年 2 月 14 日（金）、北海道立道民活動センター（かでの2・7）で、グリーンシード21との共催、公益財団法人北海道国際交流・協力総合センターの後援によるフォーラム『アジアと北海道のつきあい方 Part14』を開催しました。

第1部では、台北駐日経済文化代表處札幌分處課長 鍾宜錚（ショウ ギ ソウ）さんから、講話をいただき、第2部では、北海道大学の留学生をお招きし、「アジアの留学生と語る」と題して、パネルディスカッションを行いました。

フォーラムは、当 ACADEMY 理事の庄司清彦さんの進行で行われ、その冒頭、理事長の熊谷雅幸さんから、鍾宜錚さん、留学生の方々、フォーラムへご参加の皆さんに、お礼の挨拶がありました。



第1部：講話のご紹介

台北駐日経済文化代表處札幌分處の鍾宜錚さんからは、「北海道から見た台日関係と地方交流」というテーマで、札幌分處の役割や、台湾の政治、昨今の台湾情勢、台湾の国際組織参加と国際貢献のほか、台湾と北海道交流などについて、豊富なデータや写真などにより、貴重なお話をいただきました。概要は、次のとおりです。



（鍾宜錚さんのプロフィール）

○台湾大学政治学科大学院 卒業

○2018 年、台湾外交部入省。2018 年～2021 年、台湾外交部ヨーロッパ局 科員。2021 年 7 月、台北駐日経済文化代表處札幌分處 課長。現在に至る。

（講演概要）

台北駐日経済文化代表處札幌分處は、事実上の総領事館としての任務を果たしています。その内容は、台湾－北海道間の友好親善交流の拡大（相互訪問や経済・貿易、産業、文化、観光等各方面的の交流活動を後押しするとともに、自らも行う）や、領事業務（パスポートやビザの発行、文書の認証等）、台湾人の保護・緊急時対応（救難救助）などです。

次に、台湾の政治に関してですが、昨年（2024 年）1 月の総統選では、民主進歩党（民進党）、国民党、台湾民衆党（民衆党）の三党三つ巴の末、558 万票を獲得した民進党の賴清徳（ライ チントー）副総統が勝利しました。

また、同時に行われた台湾の国会（立法院：113 議席、任期 4 年）の選挙では、国民党：52 議席、民進党：51 議席、民衆党 8 議席、無所属 2 議席となり、どの党も過半数に至らなかったため、8 議席を獲得した民衆党の今後の動きが注目されています。

賴総統は、5 月 20 日の就任演説では、「民主、平和、繁栄の台湾を築く」として、次のような考

え方を示しています。

○現在の台湾は半導体先進プロセスを掌握し、AI 革命の中心に位置している。「世界の民主主義サプライチェーン」の鍵であり、国際社会との連携を深めていく。

○産業のスマート化や航空宇宙産業への進出、海洋探索、環太平洋経済連携協定（TPP）への加入などによる国内産業の世界展開を目指し、台湾の発展を推し進めていく。

○蔡英文（ツァイ インウェン）前総統が掲げていた「4 つの堅持」（①自由民主の憲政体制、②中華民国と中華人民共和国は互いに隷属しないこと、③主権への侵犯と併吞を許さないこと、④中華民国台湾の前途は台湾の全ての人民の意志に従わなければならないこと）に言及し、中国が対等、尊厳の原則の下で台湾の民選による合法的な政府と対抗の代わりに対話を、封じ込めの代わりに交流を進めることを望む。

○地域の平和を守るための 4 つの支柱

- ・台湾の自衛力を強化する
- ・経済安全保障を強化する
- ・他の民主主義諸国連携を強化する
- ・着実且つ原則に基づいた対中国政策を維持する



【賴清徳総統】

そして、台湾の建国記念日ともいえる昨年 10 月 10 日の双十国慶節祝賀大会では、「台湾を団結させ、共に夢を実現しよう」をテーマに演説しました。

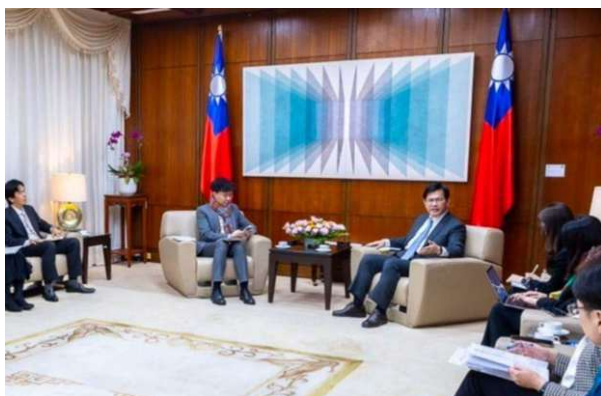
その中で、台湾全体の「国防」「民生」「防災」

「民主主義」の四大分野における強靱性を高めることで、台湾はより安全になり、台湾海峡もより安定したものになると述べるとともに、台湾の半導体、人工知能（AI）、軍事産業、サイバーセキュリティ及び次世代通信の「五大信頼産業」をさらに発展させ、世界市場を開拓していくことも強調しました。

また、台湾外交部の林佳龍（リン ジャーロン）部長（立法委員：民進党所属）は、立法院で就任して以来の議会報告（2024 年 10 月 21 日）を行い、就任して以来、「総合外交」を推進していると話しました。「総合外交」には、

- ・民主主義の国々と友好を結ぶ「価値観外交」
- ・地域の平和と安定を守る「同盟外交」
- ・経済発展を推進する「経済外交」の 3 つが含まれており、その進展について報告がありました。

なお、林部長は、日本経済新聞と日経アジア（日本経済新聞社が発行する英文ニュースメディアでアジアの目線で発信）の取材にも応じています。その中で、「日本と台湾は防災などを通じて交流を深めるべきである」とお話しするとともに、「台湾の半導体産業は世界のサプライチェーンの核心であり、すでに世界の投資対象となっている。これは国際経済協力における台湾の地位を押し上げている。日本政府も台湾との経済連協定（EPA）の交渉を加速すべきである」と述べました。



【林佳龍部長（写真右） 日本経済新聞取材】

次に、台湾の国際組織への参加についてですが、

- ・ CPTTP（環太平洋パートナーシップに関する包括的及び先進的な協定）、
- ・ WHO（世界保健機関）、
- ・ ICAO（国際民間航空機関）、
- ・ UN（国際連合）、
- ・ INTERPOL（国際刑事警察機構）、
- ・ UNFCCC（気候変動に関する国際連合枠組条約）の何れの組織にも参加できていません。

台湾を取り巻く国際状況は厳しさを増しております。特に、1971 年いわゆる国連の第 2758 号決議案により、中華民国は国連から脱退を余儀なくされました。その決議案は中国代表権の討論にとどまり、一つの中国の原則や台湾のことを全然触れていません。台湾は国際組織に参加する資格を当然有するものであります。

UNFCCC の世界大会、COP30 が今年、2025 年 11 月にブラジルで開催されます。台湾の有意義な参加に皆様のご支持ご声援をお願いいたします。

昨年（2024 年）12 月の北海道議会では、台湾の UNFCCC の参加を支持するという意見書が可決されたことを申し上げたいと思います。

次に、最近の台湾と北海道の交流状況について、お話しします。2022 年以降、台湾各地域と、道内市町村などの間で、次の 18 組の友好交流協定（覚書含む）が締結されました。

- ・ 白老町×花蓮県秀林郷（2022.8.3）
- ・ 浦河町×花蓮県新城郷（2022.8.10）
- ・ 釧路市×花蓮市（2022.8.31）
- ・ 清水町×台中市政府教育局（2022.10.17）
- ・ 網走監獄博物館×嘉義旧監獄（2022.12.20）
- ・ 厚沢部町×花蓮県寿豊郷（2023.3.31）
- ・ 安平町×台南市安平区（2023.4.27）
- ・ 余市町×彰化県彰化市（2023.5.18）（※友好交流覚書）
- ・ 余市町×宜蘭県員山郷（2023.5.19）
- ・ 余市町×彰化県彰化市（2023.7.21）
- ・ 釧路町×花蓮県吉安郷（2023.11.22）
- ・ 稚内市×屏東県恆春鎮（2023.11.28）

- ・北海道庁危機対策局×屏東県消防局（2024.4.10）
 - ・沼田町×花蓮県瑞穗郷（2024.6.20）
 - ・森町×彰化県彰化市（2024.8.19）
 - ・富良野市×台南市（2024.8.28）
 - ・美唄市×花蓮縣富里郷（2024.10.1）
 - ・利尻富士町、利尻町×屏東県琉球郷（2024.11.15）
- （※「郷」は「県」の下部の行政区）

いくつか説明しますと、監獄という共通点から、台湾中部にある嘉義旧監獄と網走監獄博物館の友好交流協定、ウイスキーの製造という共通点から、台湾北部の宜蘭県（ぎらんけん）の員山郷と余市町との友好交流協定、雄大な山の島という共通点で、台湾南部にある屏東県（へいとうけん）の琉球郷と利尻町、利尻富士町との友好交流協定などがあります。

最近の友好交流事業では、

（2024 年）

- ・ 10 月 29 日白老町が花蓮縣秀林郷を訪問
- ・ 11 月 7 日釧路町が初めて花蓮縣吉安郷を訪問
- ・ 11 月 13 日に美唄市が初めて花蓮縣富里郷を訪問



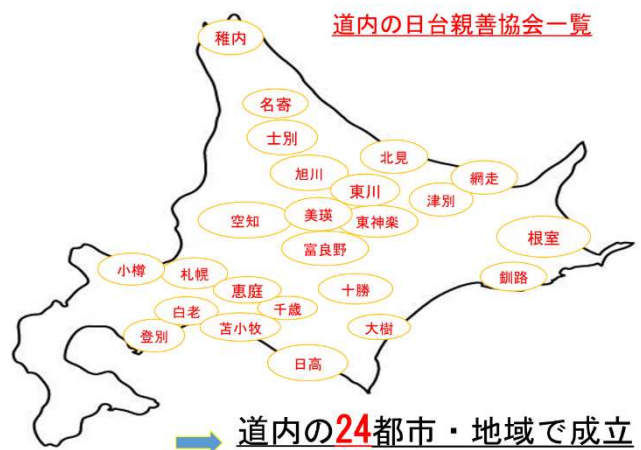
（2025 年）

- ・ 2 月 27 日花蓮県瑞穗郷が初めて沼田町を訪問があります。

また、2024 年 2 月 25～29 日に、帯広北高校チアリーディング部が十勝日台親善協会の交流事業の一環で、台湾のプロバスケットボールリーグが行われている会場で、パフォーマンスをしました。



ちなみに、道内には、24 の都市・地域に日台親善協会があります。



また、道内では、友好議員連盟も設立されており、2022 年以降、設立が進みまして、現在、次のように、12 となっています。

- ・北海道議会日台親善議員会（2013.03.06）
 - ・札幌市議会日台友好議員連盟（2014.05.22）
 - ・釧路市議会日台友好促進議員連盟（2014.04.01）
- （2022 年～）
- ・恵庭市議会日台友好議員連盟（2022.2.17）
 - ・名寄市議会日台友好親善議員連盟（2022.3.17）
 - ・函館市議会日台友好議員連盟（2022.6.13）
 - ・安平町議会日台友好議員連盟（2023.6.22）
 - ・旭川市日台友好促進議員連盟（2023.6.30）
 - ・浦河町議会日台友好議員連盟（2023.12.14）
 - ・釧路町議会日台友好議員連盟（2024.1.15）
 - ・白老町議会日台友好議員連盟（2024.6.21）
 - ・厚沢部町議会日台友好議員連盟（2024.9.11）

青少年交流については、台湾への修学旅行、昨年（2024年）は350名以上が台湾を訪問しました（2023年は7校700名以上）。

今年は小樽未来創造高校や函館工業専門学校が修学旅行を行う予定。来年は網走南ヶ丘高校、倶知安農業高校が訪台する予定となっています。

防災交流については、釧路町と吉安郷との友好交流協定には災害発生時における物資提供について書かれていますし、昨年の4月10日に北海道庁危機対策局と屏東縣消防局が防災交流覚書を結びました。



また、能登半島地震への人道支援につきました。台湾政府は6千万円の寄付を発表しました。民間から寄せられた義援金は約5億4159万台湾元（約25億4500万円）に達しました。



写真：Taiwan Today

2024年4月3日に発生した台湾東部の花蓮大地震に対しましては、北海道の各界から120人以上のお見舞いをいただくとともに、2千万円近

くの義援金を賜りました。



【花蓮大地震へのお見舞い（2024年4月）】

今年、1月21日の台湾南部の嘉義地震の際も北海道各界からお見舞いの言葉を頂きました。この場を借り、お礼を申し上げます。

最後になりましたが、現在、台湾と北海道の間の航空便の相互往来は、2025年1月時点で、週110便以上になっています。

台湾-北海道航空便の相互往来（2025年1月時点）



今後とも、北海道と台湾の交流が一層深まっていくことを願っております。台北駐日経済文化代表處札幌分處といたしましても、北海道と台湾の架け橋として、友好交流の促進に尽力してまいります。今日のご清聴ありがとうございました。また、日本自治 ACADEMY の10年以上の台湾マップの事業展開にも謝意を表します。

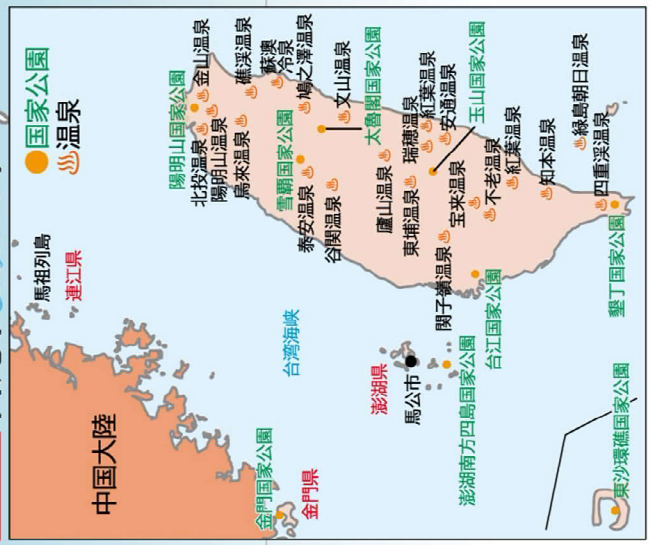
2024年版 TAIWAN MAP

台湾マップ

● 場所: 太平洋 ● 経緯: 北緯23度46分 東経121度0分
● 面積: 約36,000平方km ● 面積順位: 136位
● 最高峰: 3,952 m (12,966 ft) ● 最高峰: 玉山
● 最大都市: 新北市(人口4,041千人)
● 人口: 23,413 千人(2024年現在) ● 人口密度: 648.43人/㎡
● 言語: マンダリン、台湾語、客家語、各原住民族の言語
● 宗教: 仏教、道教、キリスト教、カトリック教、イスラム教
● 民族: 漢民族98% (河洛74%・客家12%・外省人12%)、台湾原住民族2%

● 陽明山国家公園 ● 金山温泉 ● 北投温泉 ● 陽明山温泉 ● 烏來温泉 ● 泰安温泉 ● 谷關温泉 ● 廬山温泉 ● 東埔温泉 ● 瑞穗温泉 ● 紅菜温泉 ● 安通温泉 ● 不老温泉 ● 宝来温泉 ● 関子嶺温泉 ● 澎湖国家公園 ● 澎湖南方四島国家公園 ● 澎湖馬公市 ● 澎湖県 ● 金門県 ● 金門国家公園 ● 金門列島 ● 馬祖列島 ● 連江県 ● 陽明山国家公園 ● 金山温泉 ● 北投温泉 ● 陽明山温泉 ● 烏來温泉 ● 泰安温泉 ● 谷關温泉 ● 廬山温泉 ● 東埔温泉 ● 瑞穗温泉 ● 紅菜温泉 ● 安通温泉 ● 不老温泉 ● 宝来温泉 ● 関子嶺温泉 ● 澎湖国家公園 ● 澎湖南方四島国家公園 ● 澎湖馬公市 ● 澎湖県 ● 金門県 ● 金門国家公園 ● 金門列島 ● 馬祖列島 ● 連江県

台湾(Taiwan)



- 台湾本島にある県**
 - 新竹県(しんちゅうけん)
 - 苗栗県(びょうりつけん)
 - 彰化県(ちやうほうけん)
 - 南投県(なんとうけん)
 - 雲林県(うんりんけん)
 - 嘉義県(かぎけん)
 - 屏東県(へいとうけん)
 - 宜蘭県(ぎらんけん)
 - 花蓮県(かれんけん)
 - 台東県(たいとうけん)
- 台湾離島部にある県**
 - 澎湖県(ほうこうけん)
 - 金門県(きんもんけん)
 - 連江県(れんこうけん)
- 直轄市**
 - 台北市(たいぺいし)
 - 新北市(しんべいし)
 - 桃園市(とうえんし)
 - 台中市(たいちゅうし)
 - 台南市(たinnanし)
 - 高雄市(たかおし)
- 省轄市**
 - 基隆市(きーるんし)
 - 新竹市(しんちくし)
 - 嘉義市(かぎし)
- 県轄市**
 - 彰化市(しやうかし)
 - 屏東市(へいとうし)
 - 竹北市(ちくほうし)
 - 員林市(いりんし)
 - 斗六市(とうろくし)
 - 台東市(たいとうし)
 - 花蓮市(かれんし)
 - 頭份市(とうぶんし)
 - 南投市(なんとうし)
 - 宜蘭市(ぎらんし)
 - 苗栗市(びょうりつし)
 - 馬公市(まこうし)
 - 朴子市(はくし)
 - 太保市(たいほし)

※このMAP及び掲載DATAについて、コピーなどの転載を禁じます。
※背景色は、青いヒスイの台湾玉をイメージしています。

SUSTAINABLE GOALS
Non Profit Organization
Japan Autonomous Academy
日本自治 ACADEMY

〒100-0001 東京都千代田区千代田2-2-1
TEL: 0155-4-2595 FAX: 0155-4-2596
http://www.japan-a-academy.jp
info@japan-a-academy.jp

【2024 年版・日本自治 ACADEMY 制作★オリジナルマップ（台湾マップ）表面】

第2部：パネルディスカッションのご紹介

テーマ：「アジアの留学生と語る」

（お招きした留学生の方々）

●CHHIM EAVLY（チュム イヴリ）さん

北海道大学工学院修士1年（カンボジア）

●梁瑄婷（リヤーン シュエンティーン）さん

北海道大学文学院アイヌ・先住民学研究室修士1年（台湾）

●朱竑宇（ジュウ ホン ユー）さん

北海道大学法学研究科博士1年（台湾）

（ファシリテーター：進行役）

●中尾敦（なかお あつし）さん

公益財団法人はまなす財団事務局長兼総務企画部長

（パネルディスカッション概要）

庄司（フォーラム全体の司会者） これから、第2部を始めさせていただきますが、その前にご案内がございます。皆さんから、留学生の方々への質問を随時受け付けることとしております。右手のプロジェクタースクリーンのQRコードをスマホで読み取っていただき、質問を入力していただくと、リアルタイムで進行役の方に伝わりますので、よろしくお願いいたします。

それでは、ここからの進行を中尾さんをお願いしたいと思います。

中尾 皆さん、こんばんは。公益財団法人はまなす財団で事務局長をしております中尾と申します。よろしくお願いいたします。

最初に、私の自己紹介をしたいと思います。帯広出身で、東京の大学を出まして、平成5年に道庁に入り、その後、30年間。道内各地で仕事をしてまいりました。一昨年、53歳で道庁を早期退職しまして、現在は、はまなす財団で全道の



地域づくりのお手伝いをさせていただいております。

私は、残念ながら、国際交流という仕事に携わったことはありませんが、観光や交通の分野で海外の方とお付き合いをさせていただきました。特に、コロナ前には、航空関係の仕事に携わっておりまして、アジア各地から北海道への航空機の就航の要望がたくさんございました。

それが、コロナで一変しまして、空港や観光地から外国の方が一切なくなってしまうという衝撃的な事態を現場で体験いたしました。

それが、早いもので、コロナから2年、この間の回復は本当に目覚ましいものがございます。昨年の全国の訪日外国人客数は、すでにコロナ禍前を上回り、3,338万人となっております。また、本道における在留外国人の方も昨年夏に、初めて6万人を超えたとも聞いております。

北海道においては人口減少が進んでいますが、まさに地域を支える新たなプレーヤーとしての役割が、外国人の方に期待されているものと思います。

そのような中、本日は、「アジアの留学生と語る」というテーマで、北海道大学の留学生、3人の方にお越しいただき、パネルディスカッションを進めてまいります。

それでは、まず、お三方の自己紹介から入らせていただきます。それでは、CHHIM（チュム）さんからお願いします

CHHIM EAVLY（チュム イヴリ） こんにちは。カ

ンボジアから来ましたチュム イヴリといいます。カンボジアといいましたら世界遺産のアンコールワットが有名です。私の出身の首都プノンペンからは、バスで 6 時間ほどかかります。今まで、3 回しか行ったことがありません。

今は、北大工学院の修士 1 年です。土木を勉強していきまして、橋の研究を行っています。今日はどうぞよろしくお願いします。

梁瑄婷（リヤーン シュエンティーン） 皆さん、こんばんは。リヤーン シュエンティーンと申します。私は台湾の中部、彰化県の出身です。台中県の隣です。彰化県で一番有名なのは、鹿港（ルーカン）という伝統的な文化の残る観光地です。私は小さいころから、よく家族と訪れたところ です。

今は、北大の先住民学研究室で、日本と台湾の先住民の集団的権利について研究しています。本日はよろしくお願いします。

朱竑宇（ジュウ ホン ユー） 皆さん、こんばんは。私は、ジュウ ホン ユーと申します。私の出身は台湾の新北（シンペイ）市というところです。新北市は、台北市を取り囲む形となっておりまして、人口が多いところです。有名な観光スポットは、九份（キュウフン）です。

今は、北大の法学研究科の博士 1 年です。労働法を専攻しています。日本と台湾の労働法を比較研究しています。本日はよろしくお願いします。

中尾 ありがとうございます。それでは、世界に留学先は、一杯あると思うのですが、なぜ、北海道を、なぜ北大を選んだのでしょうか。動機をお聞かせください。

CHHIM なぜ北海道に来たかを答える前に、なぜ日本に来たかについてお話します。私は日本の技術を学びたくて、日本に来ようと思っていました。子どもの時から、橋梁が好きで、将来、橋

の建設に貢献できる仕事に就きたいと思っていましたし、日本の NHK、カンボジアでもカンボジア語で放送されていますが、日本の技術も紹介され、日本に憧れていました。

そして、なぜ北大を選んだかという、カンボジアはすごく熱い国で、日本に来るまでは雪を見たことはありませんでした。日本に来て、雪で一番きれいな場所を調べたら、北海道でしたし、北大も日本の旧帝大の一つで、教育レベルが高いということで、留学先を選びました

梁瑄婷 台湾では、これまで、先住民族の研究は、アメリカとかカナダとか欧米の研究が中心で、日本は少なかった。また、日本のアイヌ民族の状況と、台湾の先住民族のシラヤ族の状況が似ているので、日本と台湾の先住民族の政策について研究したいと思いまして、日本を選びました。

そして、アイヌ民族は、ほぼ北海道にいますので、現地調査をするなら、北大が一番近いということや、アイヌ民族の研究者も北大に多いということで、北大を選びました。

朱竑宇 最初、台湾にいた時は、薬学を勉強していましたが、法律も勉強したいと思い立ち、台湾のロースクールに入りまして、労働法の講義を受けていた時に、先生から、日本の国鉄民営化のドキュメンタリー番組を紹介され、そこから、労働法に興味を持ちました。

そして、台湾と日本の労働環境は似ていることに気づきましたし、台湾の労働法の学者は日本と比較研究をすることが多いともわかりました。丁度、台湾の大学での指導教員が、北大の出身でもあったので、そのご縁があって、北大に来ました。

中尾 ありがとうございます。それぞれの興味や、研究の専門分野と深い関わりの中で選ばれたということが、よくわかりました。それでは、学問的なことはさることながら、日本に住んでみて、あるいは来てみて、一番びっくりしたこと

とか、これはおかしいとか、色んな驚きがあったことと思いますが、ファーストインプレッションといいますか、最初、どんなことをお感じになったか、お聞かせください。

CHHIM 実は、私は日本でもう7年目です。最近驚くことはありませんが、日本に来た頃ですと、日本語学校に通うために、東京の新宿に1年間いたのですが、電車やバスが時間通りに来るのが驚きました。カンボジアにもバスとか公共交通機関があるのですが、渋滞などで、時間通り来ることはまずありません。それと、街中にゴミ箱がおいていないのに、綺麗な事です。あとで、ゴミ箱がないと、みんなゴミを家に持ち帰るから、街が綺麗なのだと気づきました。カンボジアも見習いたいと思います。

梁瑄婷 初めて日本に来たのは、今回の留学ではなく、高校生同士の交流の時です。その時感じたのは、日本の学校の放課時間が早いということです。高校は大体午後3時くらいで放課して、私がいた台湾の私立高校は午後5時でした。日本の場合、早く終わって、部活とか自分で勉強できることが、一番の驚きでした。

朱竑宇 一番印象的なのは、車に乗っている人が、人を優先することです。台湾は、法律を改正するなど、だんだん人優先の交通に変わってきてはいますが、実情はまだ車優先です。

中尾 ありがとうございます。皆さんの人となりが見えてきたところで、差し支えない範囲で皆さんの生活のことをお聞きしたいと思います。勉強だけではなく、アルバイトや、地域の方々との交流、趣味などについて、お聞かせください。

CHHIM 平日は学校の研究で忙しいので、週末に、家の近くのスーパーのベーカリーアルバイトをしています。趣味は旅行や小説などの本を読むことです。交流活動は、JICAが主催する小学校

での交流イベントや、北大が実施する交流イベントに時々、参加したりしています。

梁瑄婷 私は、二つアルバイトをしています。一つは、日本語学校での留学生の生活サポートや翻訳作業。もう一つは、北大のインフォメーションセンターで、観光客のキャンパスツアーのコース案内などです。大学でサークル活動もしていきまして、今は、北大混声合唱団に入り、北海道合唱コンクールにも参加しました。すごく忙しい中ですが、楽しい経験です。

朱竑宇 北大のボランティアサークルに参加しています。そのサークルは、自宅の周辺の町内会や児童会館で手伝いなどを行っています。そのおかげで、盆踊りの時などでは、浴衣も着させていただいています。また北海道教育委員会と北大では、夏休みに、留学生と高校生の交流イベントを行っているので、私は、地方の高校に行って、高校生たちに自分の国のことを紹介しています。去年の夏は釧路と松前に行きました。貴重な経験でした。



中尾 ありがとうございます。皆さん、日本語が堪能でいらして、日本社会の中にとけこんで生活していらっしゃることがわかりました。そのような中、文化の違う国で生活する上で、お困りになることも多々あるかと思いますが、日本人や、日本について、どのようにお感じになっているか、お聞かせください。

CHHIM カンボジア人の私からみて、日本は利便性が高い国です。水道水でも蛇口から飲めます。カンボジアではそうになっていません。水道普及率も、日本は 98%と聞いていますが、カンボジアはそういうレベルではありません。あとは、日本の治安がいいことです。一人で歩いていても全く心配ないです。良くない点ですと、交通費がちょっと高いことです。利便性を高めるためには必要なことかもしれないですが、旅行が好きで私にとっては、残念なことです。

梁瑄婷 日本は、治安がいいのと、皆さん、とても親切です。助けてもらうことも多いです。また、考えていただきたい点は、行政手続です。日本語がわからない学生がたくさんいるので、いろいろな行政手続きの中で、日本語だけの対応があるので、もっと多言語対応を進めていただければと思っています。サポートのない学生は、自分だけで手続するのは難しいです。

朱竑宇 ネガティブなことは、あまりありませんが、クレジットカードの申請が、外国人にとってはハードルが高いです。今は中国系のクレジットカードを持っていますが、最初は、日本のクレジットカードを申請しようと思いました。日本のカードはいろいろなところとコラボしているので、アイドル好きな私にとっては、アイドルイベントへの参加が優先される権利を持つカードの申請が通らないことは、非常に残念なことでした。

中尾 ありがとうございます。いろいろと生活の話などを伺ってきましたが、ここで、観光の話をしてみたいと思います。皆さんから見て、北海道の観光地の一押しなどを教えていただければと思います。

CHHIM 私は一つを紹介するなら、小樽です。ガラス工芸が印象に残っていて、年 3~4 回行きます。夏に行くと、風鈴が飾ってあり、とても日本

らしいです。

梁瑄婷 私は、白老のウポポイが好きです。ウポポイでは多言語対応も進んでいて、外国人の友達もいい場所だと言っています。



朱竑宇 北海道の一番の魅力は雪ですね。また、冬には北海道各地で特有のイベントが実施されていて、それがとても魅力的だと思います。

中尾 会場の方からも質問が来ていますが、皆さん、ウインタースポーツはやられていますか。

朱竑宇 私は、スキーをしました。北海道の雪質はとてもいいです。

CHHIM まだ、スキーには行っていないですが、今月下旬に、ニセコに行く予定です。ニセコはパウダースノーで、雪質が柔らかく、転んでも痛くないと思います。雪質は、本州とは違うと感じています。

中尾 ありがとうございます。ヒグマを見たことがありますかという質問も来ていますが、どうでしょうか。

CHHIM 動物園では見ましたが、まだ、外では見たことがありません。

中尾 札幌市内でも目撃されていますので、皆さん、十分注意してください。それでは、観光の

魅力を伺ってまいりましたが、交流という意味では、日本人が外国に行って、皆さんの国を知ることが大事だと思います。日本人はパスポートの取得率が低いといわれています。国民の17%だそうです。韓国では4割、アメリカでは5割、台湾では6割です。また、若者の海外旅行離れということもいわれています。皆さんの国へ、日本人がもっと訪れるにはどうしたらいいかと思いますか。お気づきの点などがあれば、お聞かせください。

CHHIM カンボジアはどんな国か、何があるのか、日本人にはあまり知られていないと思います。カンボジア政府も、国の魅力を頑張って宣伝してはいますが、まだまだだと思います。宣伝の方法ですが、日本人の方がカンボジアを訪れて、自分のSNSなどで紹介してくれるといいと思います。また、カンボジアはまだ北海道との直行便がありません。羽田便もコロナ以降、まだ復活していません。韓国や台湾などで乗り換えてカンボジアに向かうということになるので、不便ではないかなと思っています。改善が必要です。

梁瑄婷 学生たちの国際交流などを通じて、海外への興味を高めることが大事だと思います。相手の国に行きたい、旅行したいというきっかけづくりですね。

朱竑宇 言葉の壁が一番大きいと思っていますが、高校生たちとの交流の中では、英語を話せる方が結構多いと感じています。話せると、外国の興味も湧いてくるので、海外へ行く方も増えるのではないかなと思っています。

中尾 旅行であれ、留学であれ、よその国に行くということは、それなりの冒険心が必要であり、ハードルもあると思います。若者には、それを乗り越えてチャレンジしてほしいと思います。それでは、皆さんの将来について伺いたいと思います。北大卒業後のビジョンなどについて、お聞か

せください。また、できれば、北海道との交流の中で、皆さんが果たしていく役割などについても触れていただきたいと思います。

CHHIM 来年3月に、修士2年を卒業しますが、日本の企業の内定を受けています。私は、橋が好きなので、橋をメイン事業として行っている土木建設コンサルタントの会社です。東京で働きます。将来は、カンボジアと日本の架け橋になりたいと思っていて、日本で学んだ知識や、実務経験をカンボジアで生かしたいと考えています。

梁瑄婷 卒業後の方針はまだ確定していません。今年4月から修士になりますが、博士課程に行くことも考えています。将来は研究者として、日本と台湾の先住民族の交流促進に寄与したいと考えています。

朱竑宇 卒業後は台湾に戻り、大学の教授を目指したいと思っていますが、日本でも、ポストがあれば挑戦してみたいと思っています。そして、自分の専門性を活かして、もっと日台の学術交流を盛んにしていきたいと思っています。

中尾 ありがとうございます。終了時間がせまってきました。まとめとして、今後、アジアとの交流を進めていくうえで、一番大事なことは何だとお考えですか。

CHHIM 交流の柱である観光の面で言うと、各国政府は観光振興に力を入れています。私たちにできることは、自分の声を発信することです。例えば、私のように、日本各地を旅して、気に入ったところをSNSに載せたり、カンボジアの人たちに日本に遊びに来るように発信をしております。また、一人の声だと足りないと思うので、自分の友達、家族、知り合いに日本や自分の国の魅力を発信するよう働きかけたいと思っています。

梁瑄婷 一番大切なのは、自信だと思います。自分の国の良いところなど、自信を持って、相手に勧めることです。例えば、北海道の雪質が良いとか、食文化が発展している、また、私自身もそう思っているのですが、北海道の文化が奥深いとか。台湾の人たちは、そういう北海道の魅力を感じて、たくさんの人が北海道に来ています。

朱竝宇 私は、お互いの文化を理解することが、一番大事だと思います。まもなくこちらに来て、4年目になりますが、少しずつ、日本の常識や文化がわかってきました。今日のような交流イベントを通して、お互いの文化をより理解できるなら、お互いの関係性を深めていけるといいます。

中尾 皆さん、長時間にわたり、どうもありがとうございました。本日は、「アジアの留学生と語る」と題しまして、CHHIMさん、梁さん、朱さん、3人の留学生の方から、いろいろなお話を伺ってまいりました。有意義なご助言などもいただき、私たちにとって、大変貴重な時間でした。お礼を申し上げたいと思います。

最後に気になる数字を皆さんにお伝えします。道内の自治体は世界各地と姉妹提携を結んでおります。姉妹提携も、いろいろな定義があり、それによって、数え方も変わりますが、東京にある一般財団法人自治体国際化協会が扱っている資料によると、道内では128の提携がなされているということです。地理的な事情や歴史的な経緯が背景にあると思われますが、このうち、アジアは、残念ながら、全体の22%でして、残りは欧米豪です。台湾はいくつかありますが、東南アジアは本当に少なく、CHHIMさんのカンボジアは無いという状況です。仕事や観光で多くの人が行き交っているのに関わらず、自治体の姉妹提携という点では、北海道はまだ十分ではなく、アジアに目を向ける余地が残されていると思います。

今日は、お三方のお話を通じて、アジアをより

身近に感じることができました。この場に参加した皆様方が自分にできること、小さなことから進めていく事が大切かと考えております。この後、懇親会の間もご用意されているということですので、ご参加の皆様におかれましては、更に親睦を深めていただきたいと存じます。

今日は、どうもありがとうございました。

フォーラムの全日程(第1部講話、第2部パネルディスカッション)を終了するに当たり、共催のグリーンシード21の塚本逸彦さん(幕別町議会議員)から、参加者の皆さんへお礼の挨拶がありました。



塚本 今回のフォーラム共催団体の「グリーンシード21」メンバーの塚本でございます。幕別からまいりました。本日は、お忙しい中、多くの皆さんにお集まりいただき、厚くお礼申し上げます。

登壇いただいた講師の先生、中尾さん、北大の留学生の方々、本当に生のお声を聞くことができました。私は、当ACADEMYのフォーラムには、今回初めて参加させていただきましたが、参加者の皆さんとの交流を通して、とても親睦が深まったものと感じています。

このような催しが道内の各地域で積極的に行われ、お互いの結びつきを深めていくことが必要であると感じたところでございます。

今日は、ご参加の皆様、本当にありがとうございました(了)。